

◆◆◆新刊案内◆◆◆

「東哲叢書 仏典現代語訳シリーズ」

菅野博史

東洋哲学研究所は、これまで研究プロジェクトとして、『法華経』の梵語写本の刊行を二十五年にわたって継続してきた。インド仏教、『法華経』の研究者に対して、大きな学術的貢献を果たすことができたと思う。今回、これを継承する新たなプロジェクトとして、「東哲叢書 仏典現代語訳シリーズ」に取り組むことになった。最初の成果である拙訳『現代語訳 法華玄義（上）』が、昨年十一月に刊行された。この機会に、本プロジェクトの内容、意義について説明したい。

当研究所には、法華思想の系譜を研究する部門があり、

インドの初期大乘経典を代表する『法華経』に基づく仏教思想の展開として、中国の天台智顛（五三八―五九七）、荆溪湛然（七一―七八二）、日本の最澄（七六七―七六六年二二）、日蓮（二二二―二二八二）の思想を研究している。智顛は中国天台宗の事実上の開祖であり、湛然は智顛、灌頂（五六―一六三三）の後に停滞していた天台宗の復興に努力した人である。最澄は中国の天台山に学び、日本天台宗の開祖となった。日蓮はもと天台宗から出発し、ついに日蓮法華宗を開いた。

智顛は、釈尊一代の経典のなかで、とくに『法華経』を

重視し、天台三大部と呼ばれる『法華玄義』、『法華文句』、『摩訶止観』を講説し、弟子の灌頂が書物としてまとめた。『法華玄義』は、『法華経』の思想を名・体・宗・用・教の五項目にわたって解明した書物である。『法華文句』は、『法華経』の全体にわたって、一々の経文を解釈した注釈書である。『摩訶止観』は、『法華経』に代表される大乘仏教の最高の教えである円教を体得する円頓止観について説いた書物で、一念三千説を明らかにしている。

湛然は、停滞していた天台宗を復興するために、天台三大部という枠組みを確立し、それらに対する詳細な注釈を著わした。すなわち、『法華玄義釈籤』、『法華文句記』、『止観輔行伝弘決』である。

最澄の『顕戒論』は、南都の仏教と対決して大乘円戒を弁証した書物である。『法華秀句』は、法相宗の徳一（生没年不詳）と論争して、『法華経』の優れた点を十章にわたって論述した書物である。『守護国界章』は、三一権実（三乗と一乗のどちらが真実であるか、方便であるかという問題）をめぐって、徳一と論争したなかで、もっとも合理的な書物である。

翻訳の担当者についていえば、天台三大部は、筆者が担当する。筆者は、これまで『法華玄義』、『法華文句』の訓読訳注を刊行したことがあり、『摩訶止観』についても「一念三千」の箇所については、現代語訳注を刊行したことがある。湛然の三大部注については、筆者と松森秀幸氏（創価大学准教授、東哲研究員）の共訳である。松森氏は、湛然の研究で中国人民大学、創価大学で博士の学位を取得した中国天台の専門家である。最澄の著作は、前川健一氏（創価大学教授、東哲研究員）が担当する。前川氏は明恵の研究で東京大学で学位を取得し、最澄、日蓮にも研究の領域を広げている日本仏教の研究者である。

サンスクリット語やパリー語で記された仏教文献は、現代日本語に翻訳されて、読書界に提供されてきたが、中国・日本で著わされた漢文仏教文献については、平安時代に訓読という見事な翻訳方法が生み出されたために、伝統的な訓読訳という形で提供され続けてきた。ところが、漢文教育を軽視している現代社会では、とくに若い世代にとって、訓読訳による仏教文献の紹介は、理解されない恐れがある。このような状況において、当研究所は、上記の

仏教文献の現代語訳の刊行を通じて、仏教の豊かな智慧の光明を現代社会に提供したいと考えるに至った。現代語訳は訓読訳に比べて、訳者の負担が格段に大きく、そのぶん誤訳の危険性が高いことを自覚している。読者にとって読みやすい翻訳を提供するように努めたい。最後に、読者諸賢には、厳しいご批評をお願いしたい。

(かんの ひろし／東洋哲学研究所副所長、
創価大学文学部教授)

No Image

『法華玄義』（『妙法蓮華經玄義』）全十巻は、天台大師智顛の講説を、弟子の章安大師灌頂が整理し書物とし、師匠の偉業を後世に伝えたもの。天台三大部（『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』）の一つとして、『法華經』の注釈書のなかで、古来もつとも多く読み継がれてきた。

菅野博史訳注 『現代語訳 法華玄義（上）』

A5版／上製／624頁 定価本体6,000円＋税

2018年11月18日刊

ISBN 978-4-88596-047-5

菅野博史訳注 『現代語訳 法華玄義（下）』

2019年9月刊行予定 予価本体6,000円＋税

◎問い合わせ

公益財団法人東洋哲学研究所

〒192-0003 東京都八王子市丹木町1-236

電話 042-691-6591

FAX 042-691-6588